

先月までの為替相場のレビューと、今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2015/08/03

米9月利上げの可能性を探る

通貨ペア	基調		ページ数
<u>ドル/円</u>	➡	米経済指標に一喜一憂 予想レンジ: 120.500 ~ 127.000 円	2 - 3
<u>カナダ/円</u>	➡	買い材料に乏しい 予想レンジ: 91.700 ~ 96.600 円	4 - 5

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



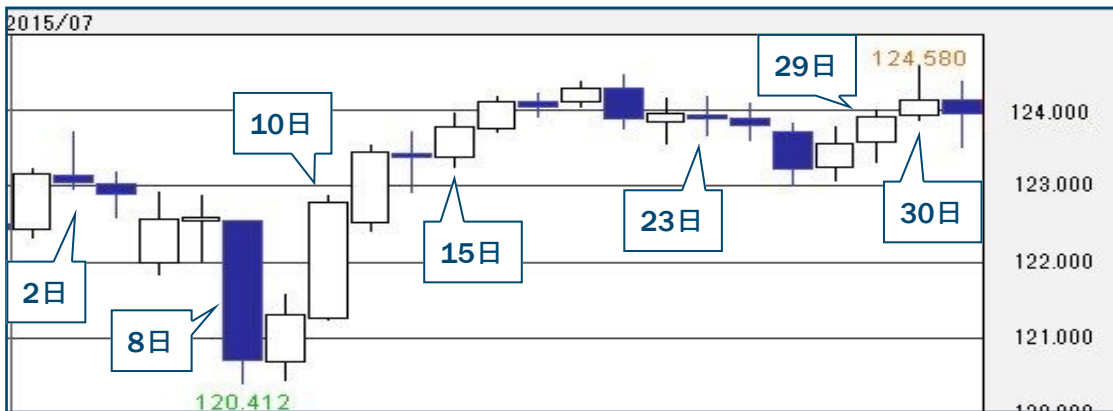
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2015Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ドル/円 7月の推移

USD/JPY

7月のドル/円相場は120.412円～124.580円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.2%の上昇(ドル高・円安)となった。ギリシャ支援問題の混迷や中国景気の腰折れ懸念から、8日には約1か月半ぶりに120.40円台まで下落した。しかしそれ以降はイエレン米連邦準備制度理事会(FRB)議長の発言などによって年内利上げの可能性が高まったためドルが上昇。世界的に株価が下落した局面では一時的にやや円高に振れる場面も見られたが、29日の米連邦公開市場委員会(FOMC)や30日の米4-6月期国内総生産(GDP)・速報値をこなした後も9月利上げ期待がある程度維持されたため124.580円まで上昇して月初来高値を更新した。ただ、31日に発表された米4-6月期雇用コスト指数が前期比+0.2%という低い伸びに留まったため124円台をキープできずに7月の取引を終えた。



四本値

OPEN	122.449
HIGH	124.580
LOW	120.412
CLOSE	123.952

2日

米6月雇用統計は、失業率こそ5.3%(予想5.4%)と2008年4月以来の低水準となったが、非農業部門雇用者数が前月比22.3万人増と予想(23.3万人増)に届かなかったのを始め、労働参加率が62.6%(予想62.9%)と1977年10月以来の低水準となり、平均時給が前月比±0.0%(同+0.2%)となるなど、総じて弱い内容であった。これを受けて米長期金利が低下するとドル売りが強まり、123円ちょうどを割り込んで急落した。

8日

日経平均や上海総合指数など、アジア株が軒並み下落する中で121円台に下落した。NY市場でも、株価が下落した上に、米FOMC議事録で「多くのメンバーが時期尚早の利上げをしないよう警告」した事が明らかになるなど、利上げに慎重な姿勢が示された事からドル売り・円買いが加速すると120.412円まで下値を切り下げた。

10日

前日終盤にギリシャがユーロ圏財務相会合に宛てて財政改革に関する新提案を提出した事などから、支援合意に向けた期待が高まった。さらに、イエレン米FRB議長が「年後半のどこかで利上げ開始が適切になると予想」などと述べた事がタカ派的と受け止められて米長期金利が上昇すると122円台後半まで上昇した。

15日

イエレン米FRB議長による議会証言の草稿が公表され「年内いずれかの時点で利上げが適切」「雇用と経済の改善に向けて見通しは良好」「インフレは2%の目標に向けて徐々に上昇へ」などが明らかになった。事前に予想されていたよりタカ派的な内容を受けてドル買いが強まった。

23日

米週次新規失業保険申請件数が25.5万件(予想:27.8万件)と、1973年11月以来の低水準となった事を好感してドル買いが強まり、一時124.10円台に上昇。しかし、その後は原油相場下落などが重石となり米長期金利が低下したため、123.70円台に押し戻された。

29日

米FOMCが政策金利の据え置きと共に発表した声明で「経済活動は最近数カ月で緩やかに拡大している」「住宅部門はさらなる改善を示している」「雇用市場は堅調な雇用増と失業の減少と共に改善を続けた」「広範な労働市場の指標は労働資源の未活用が今年初めから減少した事を示している」「委員会はいくらかのさらなる労働市場の改善がみられ、インフレが中期的に目標の2%に向かうとの合理的な確信が持てた時、金利を引き上げると予想」とした。利上げの時期についての踏み込んだ示唆がなかった事から発表直後にドル売りが見られたが、労働情勢の判断が上方修正されており、9月利上げの期待は維持された事から、急速にドル買いに転換した。

30日

米4-6月期GDP・速報値は前期比年率+2.3%と予想(+2.5%)を下回った。しかし、年次改定により1-3月期分が-0.2%から+0.6%に上方修正された事や、同時刻に発表された米週次新規失業保険申請件数が26.7万件と予想(27.0万件)より良好だった事からドル買いが優勢となり124.580円まで上昇した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

USD/JPY

米2年債利回

OPEN	0.6447%
HIGH	0.7492%
LOW	0.5374%
CLOSE	0.6606%

米10年債利回

OPEN	2.3315%
HIGH	2.4666%
LOW	2.1744%
CLOSE	2.1801%

日経平均

OPEN	20291.05
HIGH	20850.00
LOW	19115.20
CLOSE	20585.24

NYダウ平均

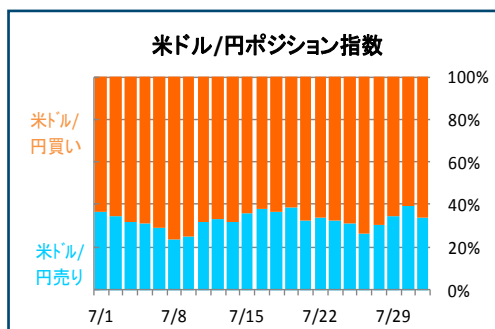
OPEN	17638.12
HIGH	18137.12
LOW	17399.17
CLOSE	17689.86

7月のポジション動向

8月の注目ポイント

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

米ドル/円ポジション指数



- ・7月米ISM製造業景況指数(3日)
- ・7月米ADP全国雇用者数(5日)
- ・日銀金融政策決定会合(6-7日)
- ・7月米雇用統計(7日)
- ・7月米小売売上高(13日)
- ・7月米鉱工業生産(14日)
- ・4-6月期日本GDP・一次速報(17日)
- ・7月米住宅着工件数(18日)
- ・7月日本通関ベース貿易収支(19日)
- ・7月米消費者物価指数(19日)
- ・米FOMC議事録(19日)
- ・8月米消費者信頼感指数(25日)
- ・4-6月期米GDP・改定値(27日)
- ・7月日本消費者物価指数(28日)
- ・米利上げに関する要人発言

8月の見通し

8月のドル/円相場はやや不安定化しそうな気配だ。米FOMCが「利上げはデータ次第」との姿勢を維持しているため、7月雇用統計(7日)や7月小売売上高(13日)などの主要経済指標に一喜一憂する公算が大きい。また、市場にややタカ派的と受け止められた7月FOMCの議事録(19日)にも神経質に反応しそうだ。その他、米金融政策当局者の発言なども9月利上げの思惑を左右する事になる。それらを消化した上で9月利上げの見通しが高まるようなら年初来高値125.853円を更新する可能性が高まる。一方で、9月利上げの可能性が低下すれば失望的なドル売りが入る事になるが、12月利上げの期待が薄れない限りドルの下値は限定的と見る。ただし、8月は需給面にも相場が不安定化する要素があるため注意しておきたい。8月は米国債の利払い・償還が例月より多い上に、その期日が日本のお盆休み期間に到来する。薄商いの中にドル売り・円買いが持込まれるためにドル/円の下押し要因になると考えられてきた。米国の利上げ期待の後退に加え、こうした動きが顕在化すれば一時的に120円台に差し込む可能性も排除できなくなる。

8月は世界的に夏季休暇シーズンとなるため市場は閑散としがちだが、「米国の9月利上げ」という大きなテーマが存在するだけに、参加者が減少する中で値動きは荒っぽくなる場面が増えそうだ。(神田)

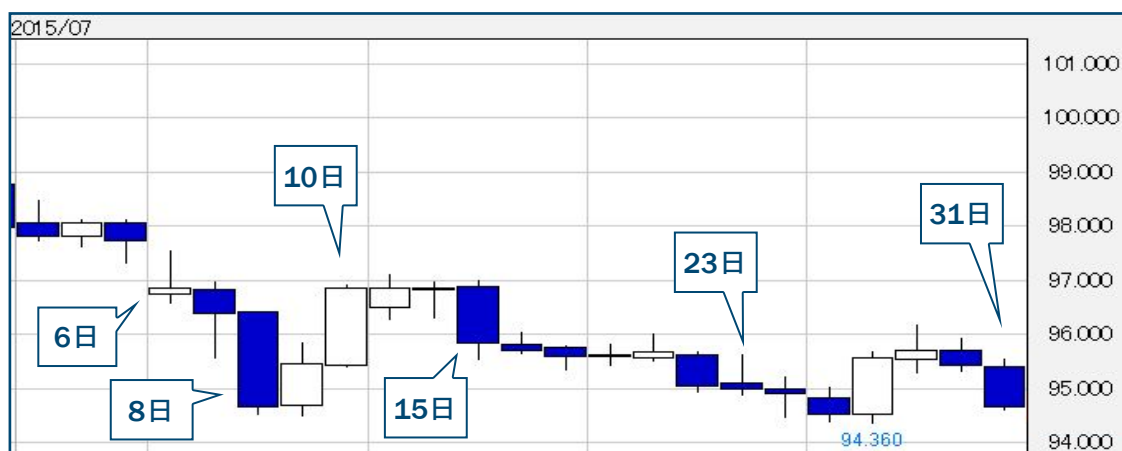
(予想レンジ: 120.500~127.000円)

カナダ/円 7月の推移

CAD/JPY

7月のカナダ/円相場は94.360～98.481円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約3.4%の下落(カナダドル安・円高)となった。

ギリシャ情勢不安を嫌気したリスク回避の動きを始め、上海株の急落、予想外の加中銀(BOC)の利下げ、イランと主要国が核協議で合意した事を受けた原油相場下落(3月以来となる46ドル台まで下落)など、カナダドル売りの材料に事欠かなかった。米利上げ開始観測からドル/カナダ相場が2004年9月以来となる1.31ドル台に乗せた(=ドル高・カナダドル安)事も重石となり、28日に4月以来となる94.360円の安値を付けた。



四本値

OPEN	98.071
HIGH	98.481
LOW	94.360
CLOSE	94.671

6日	週末5日に行われたギリシャでの緊縮策受け入れの是非を問う国民投票で「ノー(反対)」が多数となった事を受け、リスク回避の動きが強まってカナダ/円は前週末終値(97.757円)より約1円下でスタート。売りの勢いが一服すると値を戻すも、NY市場に入り原油相場が急落すると96.584円まで再び下落した。
8日	上海株が一時8%の下げ幅を記録した事や、日経平均が大幅に下落した事を嫌気してリスク回避の動きが強まり、カナダ/円は軟調に推移。NYダウ平均が下げ幅を拡大すると、94.528円まで一段安となった。原油相場が下げた事も重石となった。
10日	加6月雇用統計は、失業率が6.8%、雇用者ネット変化は0.64万人減と、予想(6.9%、1.00万人減)よりも強めの結果となった。これを受けてカナダ/円はやや上昇。欧州要人からギリシャ支援合意について前向きな発言が相次いだ事を好感した欧米株高も追い風となり、96.914円まで上値を伸ばした。
15日	BOCは政策金利を0.25%引き下げ、年0.50%とすると発表。声明で「経済をフル稼働の状態に、かつインフレ率を持続的に目標に回帰させるために、現時点で追加的な金融刺激策が必要」などとした。市場関係者の間で見方が分かれる中での利下げを受けてカナダ/円は急落。原油相場の軟調推移も重石となり、その後95.542円まで一段安となった。
23日	加5月小売売上高が前月比+1.0%、自動車を除くと同+0.9%と予想(+0.6%、+0.8%)を上回った事から、カナダ/円は95.635円まで上昇したが一時的。その後は原油相場やNYダウ平均の軟調推移が重石となり、94.880円まで反落した。
31日	加5月国内総生産(GDP)が前月比-0.2%、前年比+0.5%と予想(±0.0%、+0.8%)を下回る伸びに留まった。特に前月比は5ヵ月連続でマイナスとなり、カナダ/円は下落。その後は原油相場の軟調推移も重石となり、94.619円まで一段安となった。

CAD/JPY

加10年債利回り

OPEN	1.686%
HIGH	1.791%
LOW	1.401%
CLOSE	1.441%

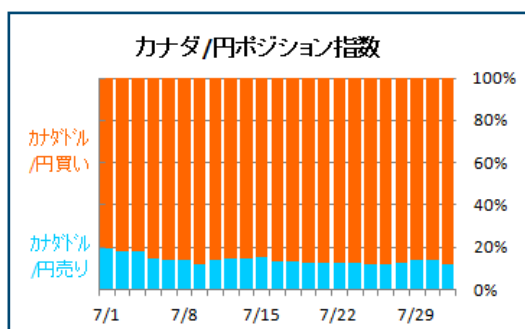
N Y 原油

OPEN	58.98
HIGH	58.98
LOW	46.68
CLOSE	47.12

NYダウ平均

OPEN	17638.12
HIGH	18137.12
LOW	17399.17
CLOSE	17689.86

7月のポジション動向



8月の注目ポイント

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

- ・日銀金融政策決定会合(6-7日)
- ・7月加雇用統計(7日)
- ・7月米雇用統計(7日)
- ・7月中国貿易収支(8日)
- ・6月日本経常収支/貿易収支
- ・7月加住宅着工件数(11日)
- ・7月米小売売上高(13日)
- ・4-6月期日本GDP・一次速報(17日)
- ・7月日本通関ベース貿易収支(19日)
- ・加6月小売売上高(21日)
- ・加7月消費者物価指数(21日)
- ・8月中国財新製造業PMI・速報(24日)
- ・7月日本消費者物価指数(28日)
- ・原油相場など国際商品価格
- ・主要国株価

8月の見通し

8月のカナダ/円相場は、先月に続き上値の重い展開が見込まれる。BOCは先月、原油価格の下落による国内経済の落ち込みに対応すべく利下げを行ったが、その後も原油価格は軟調に推移している。テクニカル面から原油相場を見ると、直近の上伸(7月29日に49.52ドルまで上昇)を阻んだ50ドルの大台に乗せられないと、反発局面入りは見込みづらい。したがって、50ドルを超えられない間は引き続きカナダドルの重石となりそうだ。

また、カナダでは7日に7月雇用統計、21日に6月小売売上高が発表される。月次GDPが連続5か月マイナスとなった事で、加経済がリセッション入りするとの見方が浮上している。BOCが緩和的な政策スタンスを維持している以上、予想より弱い結果となれば追加利下げ観測が浮上してカナダドル売り材料となる公算が大きい。

その他、カナダと米国の金融政策スタンスが正反対である事も、カナダドル相場の重石である。米9月利上げ開始観測を強める材料が出ると、ドル/カナダ相場を通じてカナダ/円相場に波及する可能性がある。米7月の雇用統計(7日)や小売売上高(13日)にも注目したい。

以上、売り材料が目立つ中とあっては積極的なカナダドル買いは期待しづらい。仮にカナダドルが上昇したとしても、原油相場の持ち直しがなければ、その動きは持続性を欠くだろう。(川畑)

(予想レンジ: 91.700~96.600円)